

体調に合わせながら、自分なりの見通しをもって、楽しく活動に参加する子

小 谷 重 之

はじめに

R子は、集団に自ら入り込んでいく積極性が少なく、新しい環境や課題では、尻込みをしたり、躊躇する、やや消極的な一面がある。しかし、未経験なことであったり、新しい課題であっても、繰り返し経験することによって、自分なりの見通しをもって、1人で最後まで活動することができる力を持っている。

そこで、若年性関節リウマチによる運動制限といった点を考慮しながらも、自分なりの見通しの中で、がんばれる力を持っている点を大切に、R子のペースを集団のペースに少しずつ引き上げていくことによって、様々な活動に楽しく参加する態度や集団を意識しながら参加する意欲を少しずつ育てようとした。その経過について述べる。

1 プロフィール

(1) 生育歴

- ・昭和51年 9月12日生 15歳2か月 女子 出生体重2550g
- ・首のすわり 4か月半 ・歩き始め 10か月 ・離乳 1歳
- ・1歳時にダウン症と診断 また、肺出血のため2か月半入院
以後、何度か入退院を繰り返す
- ・保育園 1年半通園
- ・昭和58年 本校入学 (小学部1年)
- ・昭和59年 若年性関節リウマチと診断 (小学部2年)
- ・昭和61年 4月 病気療養のためT養護学校へ転校 (小学部4年)
- ・昭和63年 9月 本校転入 (小学部6年)



鉄棒での運動に励むR子

(2) 諸検査による実態

① 知能検査による実態

津守式発達検査

運動	探索	社会	生活	言語
4:6	6:0	4:6	7:0	4:6

- ・生活面は高く、きちっとしている。
- ・いろいろやってみることを好む。
- ・運動面と言語社会面が低く、人のかかわりがもちにくい。

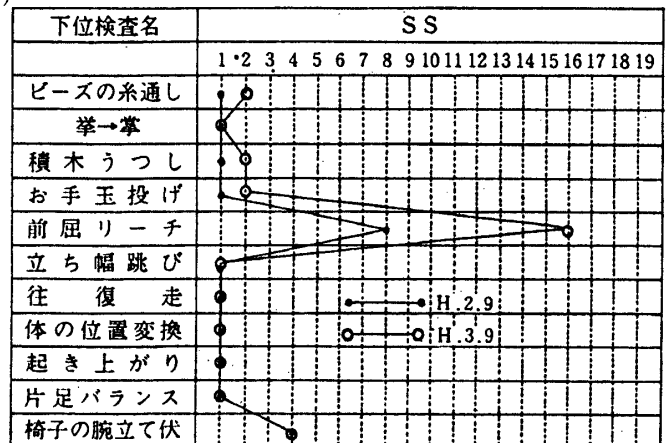


図1 MSTB評価プロフィール

・発達的には、めあてがあれば、自分をごんばらせることができる。

② MSTBによる実態

平成2年9月の検査では、ダウン症の特性である筋肉の柔らかさ以外ほとんど得点が出にくい。しかも、テストそのものへの意欲も少なかった。

平成3年9月の検査では、前頁図1に示すように、わずかではあるが、ビーズの糸通し、積木うつし、お手玉投げ、前屈リーチの項目が伸びを示している。

(3) 行動特性

人見知りが激しく、慣れない相手の前だと、かたい表情で歯軋りをしたり、うつむいたまま黙っていることが多い。慣れてくると、背中やお尻を触ったり、腕や髪をなめたり、布袋様のような笑顔をして、身体をすり寄せてくる。

学校では言葉も少なく、明朗ではないが、自分の意志をはっきり表現することができる。家庭では母親とよくおしゃべりをし、慣れた相手だと生意気な言葉を話したりもする。

動作が緩慢に感じるが、指示された場所へは集団から遅れないで移動することができるし、指示された場所へ声かけをしなくとも、1人で移動することもできる。

話し合い活動の場面では、うつむいて黙っていることが多く、消極的な参加であるが、作業の場面になると、自分なりの見通しをもって、最後まで集中し黙々と活動することができる。特に、極く近い目標があったり、励ましや声かけがあれば、なおさら自分でごんばることができる。

2 取り組みの構想

(1) 指導仮説

若年性関節リウマチによる運動制限もあり、全般的に動きが緩慢で、ややもすれば、依存的に受けとめられがちなR子であるが、今日までの取り組みで、励ましや声かけに応じて自分をごんばらせることができるようになってきている。そこで、医療との連携をとって、からだに無理のない範囲で、R子のペースを集団に近づけたり、R子の活動を集団とかかわらせていく。教師と一緒に楽しい雰囲気の中で、自分のやりたいこと、できそうなことでR子だけの活動の場を用意し、責任を持たせたり集団とかかわらせることは、最後までひとりでやりぬく集中力・持続力を育てることにつながるだけでなく、集団とかかわる楽しさにつながり、明るくて積極的な姿がめざせる。

(2) 指導方針

① 体調に合わせながらも、自分にできることは、援助や声かけをすることがあっても、最後まで自分でさせ、成就感や完成の喜びをもたせる。

・運動場面では、体調を考慮しつつ無理のない範囲で、一応は集団と同じ種目に挑戦させたり、何名かの生徒とグループを編成して、簡単なルールのあるゲームに参加させる。

② 学級の集団を少しでも意識させ、生活単元学習や日常生活などあらゆる場面で、責任をもたせながら集団とともに活動させ、もっている力を表情・身振り・言葉・絵画・文章を用いて自分な

りに表現し、できるだけ集団とのかかわりをもたせる。

3 指導の実際

(1) 運動面での実践

① サーキット運動の場面より

R子は、サーキット運動ではBグループの中でからだづくりに取り組んでいる。(85頁参照) 4月当初は、年度末休業後ということで、担任教師と一対一で行動しなければ、なかなか1時間の周回数をクリアーすることができなかった。しかも、体調も十分といえず、まったく挑戦しないで通過してしまう種目さえあった。

しかし、1時間の学習の中でのR子のがんばった姿をまとの段階で誉めたり、目標周回数をクリアーできた場合には大いに称賛し、更にその周回数をR子独自の次時目標周回수에設定し、近い目標として声かけや気持ちの盛り上げを行う、などの取り組みを続けてきた。

その結果、9月の段階では、屋内サーキットのセラピーボールのような教師の補助を必要とする種目以外は、自分1人でまわられるようになったり、さらには、1学期間跳び上がろうとしなかったゴム跳びの場面でも、踝までの高さのゴムを両足で踏み切って跳ぼうとするようになるなどの変化がみられるようになった。

また、屋外サーキットの鉄棒での懸垂に取り組むことによって、結果としてMSTB検査でもあきらかなように、昨年9月よりお手玉を随分強制的へ向かって投げることができるようになった。

② 合同体育の場面より

一学期に取り組んだサッカーでR子は、Bグループの中でゲームを行った。学習を始めたころはあまりボールに興味を示さず、自分の目の前に置いてあるボールをほんの少し蹴るといった様子であった。逆に、少し勢いのよいボールがくれば、ボールから逃げ出すといった場面もあった。

そのようなR子ではあったが、学習の中でゴールキーパーの役割を受け持つことになり、ゲームの前にゴールキーパーの練習をする時間が設定された。教師がR子の正面にゆるやかなスピードで蹴ったボールをなんとか受け止めたり弾いたりする練習を繰り返し行った。ボールが近づくまではうつむいたままのR子が、徐々にボールを意識するようになり、最後には、正面から少しそれていても、ボールの動く方向へ移動して、動くボールを受け止めることができるようになった。



サーキット運動に取り組むR子



シュートするR子

(2) 生活単元学習での実践

野外炊飯の場面より (主として野菜サラダ作りの場面)

〈野菜サラダを1人で作れるようになることを目的にして取り組んだ実践例〉

第1段階・・・生徒と教師合計10名分のサラダ作りに必要な材料と調理用具を教師と一緒に調理台へ準備する。教師の補助を受けながら野菜を洗ったり、切ったりする。盛り付けの段階で色どりを考え、コーン（缶詰）を利用する。缶切りを手にするが、なかなか最初の穴が開かず、先生の補助によってようやく最初の穴を開けることができた。これは、R子にとって初めての経験であり、缶切りにうまく力が加わらなかったためであろう。その後も額に汗を出してかなりの補助を受けながらなんとかコーンの缶を開けることができた。



第2段階・・・サラダ作りに必要な材料と調理用具はある程度見通しをもって準備できるようになった。但し、10までの数と物との対応が不十分なため、盛り付けるお皿が足りないこともある。この段階でもコーンの缶詰を開ける作業に時間を要する。やはり最初の穴を開けることができにくいらしい。しかし、この段階で教師は缶をしっかりと押さえることとし、手を携えて缶切りを操作することをひかえた。かなりの時間を必要としたが、ようやく最初の穴を開けることができた。ここを通過してしまうと、前段階よりはやく缶を開け盛り付けをすることができた。



第3段階・・・教師はできるだけ補助をひかえる段階である。ときには、R子の力を信じ、特別な手だてをせず「できました。」というまでR子に任せてしまうこともあった。この段階では缶切りの操作にも慣れ、1人ですべての作業を行うことができた。



缶切りを使うR子

4 考察と今後の課題

校内でも「無口で堅い表情のR子」といったイメージが強く、めったに笑顔を見たことがない、と思われがちなR子であるが、現在までの積み上げによって、「笑顔が多くなった。」とたくさんの先生方に言われ、確実にその力を高めている。R子の実態は先に述べたとおりであるが、からだづくりに取り組んだことによって、年間の欠席日数が減少し、検査のための定期的な通院以外の欠席はごくまれである。特に、本年度に限っていえば、通院のための欠席以外の病欠はない。また、MSTBを9月に実施し、その得点の伸びもさることながら、テストに取り組む姿勢、いいかえれば、なんとかがんばろうとする姿にその変容をみることができた。

このようなからだに高めることができたのも、やはり、運動制限を考慮しつつ、運動場面でも生活単元学習の場面でも、R子なりの着実なペースで、しかも少し抵抗を乗り越えさせ、いろいろできる自信を育てていった指導が適切であったのではないかと考える。